

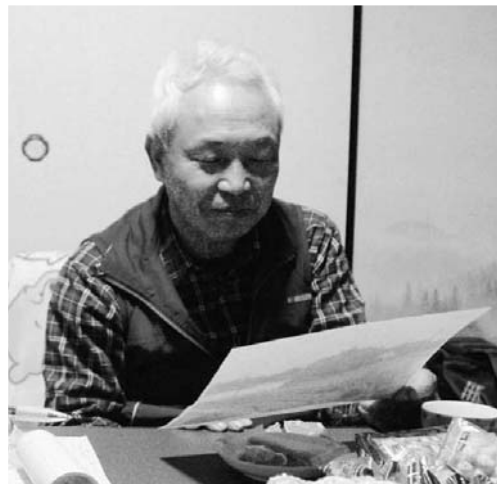


高田 秀光さん(室原)

取材者：ひろしま市民活動ネットワーク HEART to HEART 竹内・小川
取材日：11月23日

離れて暮らせど、心はいつも浪江にあり

浪江町室原に7人家族でお住まいだった高田さんご夫婦は、現在、東広島市志和町在住。息子さん夫婦と孫2人は広島市内、おばあちゃんは東京と離れて暮らす。志和町では田畑を借り、来春からの農業再開を目指して、働きながら有機栽培による野菜作りを学んでいる。



一時帰宅時の自宅写真を見入る高田さん

7人家族は県外避難
震災当日、仕事をしていたら地震がきました。すぐに高台の墓地へ避難しました。幸い自宅は海から8km離れていて、津波からは逃れることができました。その後は体育館へ避難し、当日の夜は電気もない体育館で家族みんな過ごしました。「地震が収まれば、1〜2日間ぐらいですぐに自宅に戻れる。」と軽い気持ちでいました。ところが、息子の友人が東電に勤めていて、電話で(原発が)危ないっていうんです。体育館にはテレビもラジオもなかったから、周りの誰もそんな話を信じませんでしたし

た。12日午後3時半過ぎに原発が(水素)爆発したとの話を聞いて、息子夫婦は2人の子どもの健康を考えて、先に福島を離れました。嫁いだ娘のいる広島へ。私たち夫婦もその後広島へ、ばあちゃん私の兄弟が住む東京へ行きました。でも今度、ばあちゃんもこちらで一緒に暮らすかと思っています。息子は広島市内で就職し、ときどき孫たちの顔も見えています。
広島でも白ネギを！
広島へ来てからは、田畑のある家を探しました。浪江では、早期退職後、専業で白ネギやインドキウリなどいろんな野菜を栽培していました。特に白ネギは人気があったし、これからのときに震災に遭ったというところもあって、広島でも野菜を作ろうと思ったんです。いろいろの方から田畑をご紹介いただきながら、あちこち探し回って見つけたのが、こ志和町。なだらかな山の景色や川との風景がとても良く、米と水もおいしくて、とてもいい所です。今は、東広島市内にある農業法人で働きながら、来春からの野菜

作りを学んでいます。機械も手に入りました。福島県人会の集いに参加したことで、野菜の有機栽培の情報が入手できたので、有機栽培でやってみようと思っています。
今、思うこと
震災後のこの8カ月は長かったです。これまでに2度の一時帰宅をしましたが、2度目に戻ったときには、茎の太くなった雑草が生い茂っていました。広島では(広島市の)社協さんが被災者交流会を開催してくれて、被災者同士で顔を合わせて話もでき、連絡も取れるようになりましたが、最近はお出かけできません。支援はありがたいけど、支障ばかり受けていても自立できないから。自立するために何とか野菜づくりを軌道に乗せたいと思います。野菜づくりは少しずつできていくと思いつけど、ずっと居ると部落民の名前を忘れそうになります。でも、浪江のことは頭から離れません。共助会のみんな、毎年の新年会、そして2年毎の花見はみんなやりましょう。ぜひやりましょう！

浪江のこころ通信

第7号

平成23年3月11日に発生した東日本大震災、そして福島第一原子力発電所の事故により、福島県内外に分散避難した浪江町民。長期化する避難生活、先の見えない不安の中で、町民の皆さんがどのような思いで生活し、ふるさとへの思いを抱いているのか。

こうした町民の思いをつなげるために、“浪江のこころプロジェクト”が立ち上げられました。東北圏地域づくりコンソーシアム推進協議会(が中心となり、全国各地のNPO、大学等の皆さんが取材を進め、浪江町との連携のもと「浪江のこころ通信」が編集・発行されます。

浪江のこころプロジェクトは、分散避難している町民の皆さんの声を「浪江のこころ通信」を通してお届けし、ふるさと浪江町がかつての暮らしを取り戻すことへの願いとこだわりを発信・共有しようとするものです。

東北圏地域づくりコンソーシアム推進協議会は、東北圏(7県)の地域コミュニティ再生や協働のまちづくりの推進を目的として、大学、NPO、企業、経済団体、行政等が連携したコミュニティ支援ネットワーク。仙台が本拠地。

「浪江のこころ通信」第7号への感想をお寄せください。

【連絡先】〒976 0904 福島県二本松市郭内一丁目196-1
男女共生センター内 浪江町役場二本松事務所
「浪江のこころ通信」宛
FAX.0243 22 4261





阿久津雅信さん(権現堂)

取材者：NPO法人あきたパートナーシップ 高杉
取材日：11月24日

みんなでまた一緒に暮らしたい

大地震が起きたときはばらばらになっていた家族も、なんとか中央公園などに一時避難することができ、その後、なかなか見えない状況に不安感を抱きながらも、とにかく家族一緒に北へ北へと避難。今は、阿久津さんも奥さんも職を得て希望を持って暮らしています。



新しい職場での阿久津さん

地震は、この世の終わりかと思うぐらい揺れたよ。自分は西台の現場でエアコンの仕事をしていて、妻と息子は自宅、娘は友人宅とばらばらでした。中央公園に避難したということで確認はできたけれど、父は店の確認などでんやわんや。そうこうするうちに大津波警報がでて、とにかく山のほうに避難するよというところだったので、高台グラウンドに行き、そこで夜までいて、それから浪江中学校の体育館に移動しました。朝方、

警察が来て総理大臣の命令により「原発から20km以内は、避難してください。」と言われ、今度は津島地区の活性化センターに避難したんです。そこには新潟からの救援物資が届いていて、その素早さには感激でした。私も交通整理などを手伝いしていると午後3時くらいかな？原発の爆発による煙らしきものを見つければ、テレビのニュースを確認すると原発が爆発していました。「放射能は大丈夫なのか？」知識がほとんどない自分は、とにかく家族を連れさらに遠くに逃げられないと、とりあえず福島を目指しました。ガソリン不足、スーパーは物不足とあって、どこに行くあてがあつたわけではないので福島駅の裏で一泊、競馬場で一泊、さらに山形県の米沢のホテルに3泊と転々としてました。

聞いてください！こんな大変な状況の中でも肘折温泉（山形県）で5日間いたときにね、当時1歳の息子がはじめて歩いたんですよ。本当にうれしかったです。山形に避難中に由利本荘市の同業者から連絡があり、その方の紹介で由利本荘市の「ぼぼろっこ」というところに滞在しました。ここには由利本荘市のおかげで無料で滞在できました。その後、住む場所も確保できたので、家族7人で暮らしています。浪江町は、いいところですよ。山も海も川もあり、コンパクトで生活するにはちょうどいい大きさの町で、気候的にも暮らしやすいです。由利本荘市では皆さん良くしてくださるし、食に関する活動のつながりの知人もいるので楽しく暮らすことができます。だからといって、町を捨てたわけじゃない。今まで一緒に暮らしてきた町の人と一緒に暮らしてよかったら、最高ですね。同窓生たちもどうしているのか気になってますしね。



今野 瀬楠さん(小6)・秀哉くん(小4)(川添)

取材者：NPO法人山形の公益活動を応援する会・アミル 柴田
取材日：12月6日

今度会うときは元気で会おうね

今野さんご一家は4人家族。現在、お父さんは二本松市に単身赴任中。お母さん、瀬楠さん、秀哉くんはお母さんの実家のある山形県大江町でおじいちゃんおばあちゃんと一緒に暮らしています。

瀬楠さんの話
今は、本郷東小学校という学校にバスで通っています。前の学校よりもクラスの人数が少ないですが、先生も友だちのように接してくれて楽しく通っています。友だちのお家へもバスで遊びに行くのですが、バスが2時間に1本しかないのでも乗り遅れると大変です。浪江では「サンプラザ」に友だちや家族と買い物に行つて遊んでいたのですが、今は近くにお店が全然ないので不便です。
お父さんは、二本松市で仕事をしています。月2回くらいしか会えないのですが、お母さん、おじいちゃんおばあちゃんが近くにいるので、いとも遊びにくるので寂しいです。お父さんとはときどき電話で話しています。帰ってきたときは、オセロを一緒にしたり、買い物や遊びに行くのが楽しみです。
地震の後、仲の良かった友だちとばらばらになっちゃったけれど、この前福島市と二本松市の仮設住宅で暮らしている友だちと久しぶりに会えてとてもうれしかったです。浪江小学校の先

生も手紙やスキー合宿のときの写真を送ってくれました。先生、ありがとうございました。浪江に戻ったら前のように、一緒にゲームをしたり、みんなで買い物に行ったり、また友だちと遊びたいし、浪江のいいところやお寿司も食べたいです。今度会ったときは、みんな元気で会いたいです。
秀哉くんの話
地震が起きたとき、小学校にいて帰りの会をしました。すぐにグラウンドに避難しました。泣いている子もいたり怖がっている子もいたりしたけど、お母さんがすぐに迎えに来てくれて安心しました。
今一番楽しいのは、友だちと遊んでいるときやお父さんが帰ってきたときに家族で出かけることです。今は近所の友だちのお家から自転車で帰ることも外で遊んだりすることがおもしろいです。これから山形は雪が積もるので大変だけど、雪だるまが作れればうれしいです。友だちと冬休みは雪で遊ぼうって約束しています。最近、山形



大江町のお母さんの実家にて(左：瀬楠さん 右：秀哉くん)

の方言にも慣れて自分も話せるようになりたい。
浪江町のお祭りといえばたくさんのお祭りがあって、なみえ焼きそばもまた食べたいなあ。あと、請戸港の鮭をとるところを見学に行つたことも思い出です。この前、仙台にいる友だちに会うことができて、とても元気にになりました。まだ会ってない友だちもいるので元気がどうか知りたい。また一緒に遊びたいです。



山本江利子さん(樋渡)

取材者：NPO法人ちば市民活動・市民事業サポートクラブ 風間・鍋嶋
取材日：12月2日

「十日市」で友だちに会えてうれしかった

4月3日から3人の娘たちと千葉県市原市五井のアパートで生活しています。夫は福島に単身赴任中です。長女の花音は小学4年生、次女の花奏は幼稚園の年長組、三女の響花は3歳です。夫が音楽好きで、三人とも音楽にちなんだ名前をつけました。

震災後、福島県内の避難所を転々としました。パンとおにぎりだけの食事の繰り返しとお風呂に入れなかつたこと、未娘の夜泣きがひどく、私と母とで交代で抱っこしていたことなど思い出されます。3月半ばに、東京の義妹のマンションに避難、半月間暮らししました。おかげいで暮らす大変さはありましたが、蛇口から水が出る暮らしは、ありがたかったです。

ここでの生活は、車がなくて買い物など不便を感じています。長女に妹たちの世話を頼んで留守番してもらい、私一人で急いで買い物に行くこともあります。次女の幼稚園の送迎も、三女と私の3人で路線バスを利用して行きます。でも、長女が妹たちの面倒をよく見てくれるので、

とても心強いです。夫は月に2回は帰ってきます。夫の負担を考えると、今はそれ以上のことは望めません。できるなら浪江に帰って、家族一緒に暮らしたいですね。

子どもたちは、浪江の小学校や保育園の先生や友だち、おじいちゃん、おばあちゃんに会いたいと言います。長女は、浪江のお友だちと文通をしています。学校のことなどを書いているようです。私も、浪江の職場の方々には良くしていただいたので会いたいですね。11月に二本松で開催された「十日市」では、友だちや職場の人たちと会うことができ、とてもうれしかったです。

子どもが小さいので大変なこともありますが、でも、おかげいの人たちに支えられて何とかできています。全国に散らばっている学生時代の友人たちとは、mixi(ミクシー)で連絡を取り合っていて、必要な物を伝えると集めて送ってくれます。当初、千葉では避難者の受け入れ体制ができておらず、民間の住宅を探して、すべて自費での



左から奏ちゃん、響花ちゃん、江利子さん、花音ちゃん



栃本 信重さん(立野)

取材者：中越沖復興支援ネットワーク 水戸部
取材日：12月6日

戻れるものなら明日にでも 戻りたい気持ちです

浪江町でガス屋さんに勤務していた栃本さんは、被災直後から町内のポンベの点検等に奔走した。12日には南相馬市小高区にある金房小学校に避難をはじめ、その後各地の避難所を転々としたのち、新潟県に避難した。

11日の夜、倒れたガスポンベの確認等の仕事を終えて家に着いたのは午後8時ごろでした。家には富岡町に住む次男と、妻と孫がいました。被災時に浪江町にいた次男が家にいてくれたことは、今考えると非常に助かりましたし、安心できました。電気は使えませんが、ガスが使えたので次の日の朝はご飯を食べることもできました。その後すぐに避難指示の放送が



現在は妻と孫の3人で暮らしています。
(左から信重さん、楓ちゃん、操さん)

流れ、家族で南相馬市小高区の小高小学校に避難をしました。小学校は多くの避難者であふれかえっていたことを思い出します。その後、原町区の石神中学校に移り、17日には新潟県に向かつていました。次男が先に柏崎市に避難していたので、避難所の情報なども聞くことができ、たまたま、柏崎市の中央コミュニティセンターに避難することにしました。私の妹が柏崎市に住んでいることもあり、布団や毛布を集めてもらったり色々とお助けしました。その後、市内の総合体育館、民宿を経由して、現在は市内のアパートに妻の操と孫の楓と3人で暮らしています。楓は、通うことになった半田小学校にも慣れてきて、友だちも少しずつ増えているようで、一安心です。

私自身は、6月から9月まで柏崎市の非常勤職員として、働かせていただきました。草刈りや遊歩道の整備などをする傍ら、子どもたちに竹工作を教えたりもしていました。これは、勤務先が自然体験交流施設「ゆうぎ」という所で、その体験メニュー

を指導できるようにと、習ったものです。そうした経験を活かして、8月に福島市内で開催されたアスナロ幼稚園の集まりでは、子どもたちに竹工作でつくったトンボをプレゼントしました。私はそのバスの送迎などもしていたため、卒園式もできていないままの子どもたちに何かしてあげたいと感じたからです。子どもたちは非常に喜んでくれて、一生懸命作ったかすがありません。非常勤職員の仕事が終わった今でも、体験教室があればインスタクターとして参加したりもしています。

少しずつ柏崎市での生活にも慣れてきて、落ち着いてきた印象はありますが、やはり浪江町のことを常に考えている自分があります。この先どうなるかは全然分かりませんが、帰れるものなら明日にでも帰りたいぐらい、自分のふるさとに愛着があります。いつか帰れる日が来ることを願っています。最後に、自分たちも被災者でありながら復興に尽力されている行政職員の皆さんには、本当に感謝しています。

準備でした。つい最近、市原市でも借り上げ住宅の提供が決まっています。12月8日に引越すことになっていきます。しばらく、ここで頑張りたいと思いますが、早くまた浪江のみんなに会いたいですね。



叶谷ヨシ子さん(請戸)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 古山
取材日：12月8日

ここ笹谷は本当にいいところ 人情の厚さが身に染みます

津波で流されてしまった請戸の家は、大工をしている息子さんが建てた広い家で、息子さん夫婦や孫とともに暮らしていらっしやいました。畑仕事をする一方、絵手紙や老人会、筋力トレーニングなどを大いに楽しんでいました。



福島市笹谷東部のご自宅にて、たくさんの絵手紙とともに。

あの震災のときは、お友だちの家でお茶のみをしていました。津波警報の中、自転車で帰宅し、仕事が終わった息子と孫の3人で車に飛び乗り、「福島いいの村なみえ」に向かいました。翌日12日には浪江高校津島校に移りましたが、断水のためトイレも使えず、配給されたのはおにぎり1つ。寝泊まりするにも通路が狭く、大変でした。3日目には川俣町の公民館に移動し、病院勤めのため患者さんとも避難していた嫁とやつと合流

できました。その後すぐに家族4人で茨城県の子孫の家に1カ月ほど世話になり、4月下旬からは北塩原村のペンション「木になる家」で避難生活を送りました。そして6月2日に、この福島市笹谷東部仮設住宅に入居しました。とてもうれしい出来事がありました。兵庫西宮市の方から激励の絵手紙をいただいたんです。その方は、阪神淡路大震災で被害を受け、娘さんの家で半年間の避難生活をされた経験をお持ちで、家族や住む家のあるありがたさを伝えてくださいました。見知らぬ方にこんなにも気遣っていただいたことに、感謝で涙が止まりませんでした。私も絵手紙を描いているのでお返しをしたところ、段ボールで心尽くしの品と丁寧なお見舞いを送ってくださいました。今でも絵手紙でやり取りをさせていただいています。

また、絵を描きに表に出たときに、大木に見事な花が咲いていて、その花の名前を通りがかりのご夫妻に教えていただきました。それが縁でお家を訪ねた折、帰り際に雨が降り出し、震災後は外出時に手押し車が手放せないのですが、それをわざわざ車に乗せ、私を送ってくださいました。お食事まで一緒に頂きました。

別の方にはお茶飲みにお家に誘われ、私の好きな柿をたくさん頂いたりしました。この笹谷には人情が厚い方が多いのでしょか。本当にご近所の方々には親切にいただいています。

時折、住宅には福島大学の学生さん方が足湯とマツサージのボランティアに来てくださいます。若い男子学生さんに昔の言葉をお聞きながら楽しく過ごしたり、集会所で開かれる毎週水曜日のリハビリテーションや、健康エッセイを兼ねたお茶飲み会も重宝しています。

本当に感謝していますが、先ごろ作られたという「ふるさと浪江の歌」を聞くたびに、やはり浪江に帰りたいと思います。ですが、息子たち若い人たちの考えも大事にしなければならぬと自分に言い聞かせているところです。



近藤 公孝さん(大堀)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 佐藤
取材日：12月9日(京月窯再興初の火入れの日)

妻、京子さんの京月窯再興にこぎつけ、 次は自身の今後も

大堀に住んでいた「福島いいの村なみえ」の支配人の近藤さんは、原発事故後転々とした後、12月から妻京子さんの大堀相馬焼京月窯兼自宅として、福島市飯坂町平野の古民家に京子さんと義父母と暮らし始めました。「福島いいの村なみえ」の今後に奔走しつつ、京子さんの京月窯再興をアシスト。「ここを窯元の間でもあるけど大堀同様人々のコミュニティの場にもしたいんだ。」と語ってくださいました。



妻京子さんの作品の前で。

京月窯の火を福島で再び。実は今日は、朝からここに作った窯に初めて火を入れました。女房は窯から離れられないんです。新しい窯の加減を知るため、時間を追って窯の温度を記録したり、窯の状態を逐一観察してらるんです。あれから9カ月、やっとここまでこぎつけました。先の見えない避難生活を続ける中、女房が「このままでは居られない。」と言いつつ出ていって、不安もありましたが、私もどこかで「このままで居るのは違う。」と思うようになり、福島でまた窯が持たないか、あれこれ探しました。そんなとき、この地の古民家を紹介され、一目で気が

入りました。大堀でも築150年の家に住んでいましたから、大堀の家をほうふつとさせるこのたたずまいに、ここしかないと思いました。「福島いいの村なみえ」のこれまでを仕上げ。私の今は、「福島いいの村なみえ」の止まってしまった時を、仕上げる日々です。震災直後は、「福島いいの村なみえ」で避難してきた方々へ炊き出しをしました。原発事故後は取る物も取らずの避難で、当初は書類も何も中、散り散りになった「福島いいの村なみえ」のスタッフの今後、慣れぬ役所回りに奔走しました。そんなスタッフとは今も交流があり、ホツとするひとときです。また、ふと、遠方から「福島いいの村なみえ」を常宿として幾度となくご利用いただいたお客さまを思い出します。「どうされているかな。お会いしたいな。」と思います。無我夢中でしたが、落ち着いたら、喪失感に襲われました。今までの暮らしが変わってしまったこと。人生設計が狂ってしまったこと。すべてに禁じ得ない虚しさを感じます。これから「福島いいの村なみえ」



福島市飯坂町平野の京月窯 (看板も移設)

の仕上げに区切りがついたら、今度は私の今後を、そして業を定めねばと思っています。福島市飯坂町大堀同様、人の集まる場に。窯主である女房も言ってるんですが、ここを窯元としてだけでなく、大堀でもそうであったように、お客さまや近隣の人がふらつとやって来て、女房の作品の茶碗や茶器で、コーヒーの香りやおしゃべりを楽しむ場にしたいなと思っています。浪江の人たちがやってきて、浪江を語る場になったらいいなと思っています。「福島いいの村なみえ」の癒しが、ここでもかたちを変えて、かもしだせたらと思います。「浪江」に会いに来たなら、みなさんぜひ足を運んでください。